An important person

折原奈津子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
An　important　person

【Ｎコード】
Ｎ５７３３Ｏ

【作者名】
折原奈津子

【あらすじ】
高木綾乃、２７歳。
バツ１、子無しの一人暮らし。
２２歳の時に大法螺吹きなオトコと知らずに結婚した世間知らず。
そいつのせいで背負った借金は大金で、離婚後はとにかく必死に働く毎日。
突然の電話と訪問者のおかげで、何もかもが変わっていくとは思わずにいた。
いったいどうなるの？

序章

『匠～、女の子はね守ってやらんといかんのよ？どんな理由があっても、お腹をぶったりしたらだめなんよ？』

それは当時４歳だった義理の息子に言った言葉。

あたしは１つ年下の人と入籍したばかりで、その人には離れて暮らしていた４歳の息子がいた。

実の母親には生まれてすぐに手放され、父親の実家で育てられていた。

知り合ったのは東京の小さなバー。

熱烈なアプローチを受け、付き合いだしたけれど・・・彼の実家にはもう誰もいないんだって聞かされていた。

年の離れた姉のところに行こうと言われ、彼の故郷である西日本の小さな町に向かった。

そして、そこには彼の両親も・・・・そして４歳になると言う息子の匠も存在していた。

『どんだけ嘘言えば気が済むの！！！！！！！』

彼、貴史に詰め寄った。

すごくのどかで、周りには何もない。

本の虫だったあたしにとっては、本屋に行くのにも大変な距離になるだろう。

その町に戻りたいと言う貴史に、あたしは苛立ちを隠せなかった。

「悪かったとは思ってる。でも子供がいるなんて分かったら、嫁になんてこねえだろ？」

『だからって親まで殺すか！！！！』

子供の存在だけでなく、両親のことすら隠していた貴史。

あたしの両親にもそう言っていて、まんまと我が家の婿養子になっていた。

とにかく弁が立つというか・・・・・・・・・完全に騙された感が強いのだ。

でも結局、その結婚は1年半ほどで終わってしまった。

理由は、彼が突然姿を消したから。

しかも捜索願を出した結果、九州に渡り知り合った女性と暮らして

いたから。

許せなかった。

でもその程度の男なんだって諦めもついた。

残されたものが、いつの間にか連帯保証人にされていた１０００万近い彼の借金だけだったとしても。

毎日必死に働いて、それでもどうにもならないところは司法のお世話になって・・・・・日々の苛立ちと、自分自身の男を見る目のなさに

やっと折り合いをつけ始めるまでにかかった時間は３年。

風邪をひいてベッドに潜り込んでた、たった一人の部屋。

突然かかってきた携帯への電話と、そのあと突然やってきた人さえいなければ・・・・あたしの人生はきっとそのままだったろう。

1章　1話

『うーーーー、うっさいなぁ』

昨夜は定時で仕事を終えたあと、カフェバーを営む仲間の店でしこたま食べて飲んで帰ってきた。

それは今日が週末であり、連休初日だったからというのも関係している。

ゆっくり寝られる・・・・・そう信じて疑わなかった早朝。

眠い目を擦って、枕もとの携帯を手に取った。

『・・・・・はい』

番号は・・・・心当たりがなかった。

でもつい眠気が先に立っていたので出てしまったのだ。

そこから聞こえてきた声は、忘れたくても忘れようがない男の声。

「あ・・・・・俺・・・・・貴史」

自分勝手に出て行って、浮気して、借金置いて離婚した元夫だった。

『・・・何の用？渡す金なんかないから。逆に慰謝料払えって言いたいくらいなんだから』

あたしは彼の連れ子だった匠を可愛がっていたし、母親になりたかった。

だから慰謝料も、借金も取り立てることを諦めてしまったのだ。

季節の折に、彼の姉の元へ手紙を出していた。

携帯番号も義姉には、教えてあったのは確かだ。

彼が知らないはずのあたしの番号に電話してきたと言うことは、九州を出て実家に戻ったと言うことなんだろう。

「一言だけでも謝りたいと思ってさ・・・」

『謝ってもらっても、あたしの人生は狂ってしまったし。許す気にもならない』

「うん、分かってる・・・本当にごめん。俺、もう絶対に結婚はしない。せめてもの詫びにさ、そう決めた」

『ばっかじゃないの？あんたがそんなこと出来るわけないじゃない。舌の根も乾かないうちに、また女作るから』

「いや、もう懲りたし」

『九州で一緒にいた女はどうしたのよ』

「あー、照美？あいつはとっくに別れた」

両親が聾唖の方で、床屋を営んでいるというその女。

そんな家庭環境のせいか、自立したあとはすっかり自分本位のペースだったらしい。

だから実は妻も子もいますという状況に、だから？問題あんの？って感じだった。

見た目はいまどきの可愛い子だったから、貴史もそそられたんだろう。

でも一緒に暮らしてみたら、家事はまったく出来ないしやらない、買い物にも自分の欲しいもの以外は行かない。

そんな彼女に辟易して別れたらしい。

「お前は仕事も忙しかったけど、でも家の事はきちんとやってくれてたしなー、バカだったよな」

『今更泣き言を言うな。鬱陶しいから。匠だけはしっかり見てやって頂戴・・・・あたしの心残りはそれだけだから』

「ああ、分かってる」

『あんまり信用できないけど。じゃあ切るから』

「ああ、元気でな」

電話を切ったあと、すっかり眠気も取れてしまった。
シャワーを浴びようとバスルームへ向かった。
睡眠を邪魔された上に、それが元夫・・・・・そりゃあ気分も最悪だっての。
『あー、気分悪いし』
シャワーを浴びたあと、洗濯物を買い換えたばかりのドラム式洗濯機に放り込む。
カーペットを敷き詰めた寝室などに掃除機をかけた後、キッチンに向かいドリンクを作ってグラスに注ぐ。
フローリングの床にモップをかけながら、手にしたグラスを口にした。
最近気に入ってよく口にする、マッコリのオレンジ割だった。
むしゃくしゃしてたし、どうせ一人暮らしなのだから、誰に気兼ねする必要もない。
オレンジじゃなくてグレープの時もあるが、癖もなく度数もきつくないから普段からよく飲む。
ちょっと濁ったそれは、口当たりいい割にあまり酔いつぶれる羽目にもならなかった。

1章　2話

１ＬＤＫのマンションは、それなりに家賃もかかる。

それでも職場からの家賃補助が出ているから普通に暮らしていける。

まだ元夫の借金も少し残っているけれど、職場の待遇もこのご時勢にしてはいいので困ることはない。

元夫の貴史よりも収入が多かったのが、きっとあの男の小さなプライドに触ることだったんだろう。

何にしても勝手なやつだ。

でもそのおかげで、普通のＯＬよりは早く片がつく。

けれど司法に頼ったおかげで、あたしの法律的な信用はがた落ちだ。

そんな事をひとりごちて、あたしは２杯目のグラスを口に運んだ。

不意にインターホンが鳴った。

それは、オートロック解除を求めるものじゃない。

直接的な、ドアの外のインターホン。

誰かがオートロックを問題とせずに入り、この部屋にやってきたということだ。

面倒だったし、すっぴんだったし・・・・・酒も飲んでいる。

こんなお気楽な怠惰な時間を邪魔されたくはなかった。

無視をしていたら、またチャイムが鳴り響く。

『何なのよ・・・・』

仕方なくドアを細めにあけてみる。

『誰？』

その隙間から顔を見せたのは、よく知っている顔だった。

『せ・・・・専務！？』

そこにいたのは、あたしの勤務する市場ではかなり大手に入る酒造メーカーの専務。

あたしはその会社の営業部門に所属している。

『ど、どうしてここに？』

社内ですれ違うこともあるし、エレベーターで遭遇することもある。

それだけでなく、去年までは営業部に在籍していた専務だから、顔もよく知っている。

入社以来、直属の上司だったこともあり、かなり世話になっている
といってもいい。

「どうしてって。元部下の顔を見に来たって言ったら？」

『は？出社すれば見れますけども・・・・・』

「そりゃそうだが、たまにはプライベートの顔も見たいじゃないか」

『は？』

「とりあえず、３０分やる。出掛ける準備して来い。そうだな・・・
・ドレスコードはビジネスカジュアル程度でな」

『え？あの、専務？』

「３０分だぞ、遅れるな？」

それだけ言うと、エレベーターホールへ向かっていった。

突然やってきて、突然外出？

意味が分かりませんが！

しかも、あたし、昼間から飲んじゃってますけど！

ぶつぶつ言いながらも、上司を待たせておくわけにもいかず。

仕方なくメイクをして、淡いパープルがかったグレーのワンピースに着替えた。

同じ色目のカーディガンを手にすると、お気に入りのキャスキッ○ソンのレザーバッグを手にした。

上品な花柄の白地のバッグは、何よりもお気に入りだった。

少しヒールの低めのストラップサンダルを履くと、１つ溜息をついてエレベーターホールへ向かった。

1章　3話

『で、どこに行くんですか？』

溜息混じりに問いかけると、助手席のドアを開けながら「着いてからのお楽しみ」と言った。

なんか胡散臭い・・・・・・・彼のその時のほくそ笑んだかのような顔を見て思う。

『なんか、企んでません？』

やっぱり何か考えがあるような気がして、そう問いかけた。

「いいや？企んでなんかいないよ？」

『・・・・・・・』

彼の運転する車がどこに向かっているのか、正直分からない。

方向音痴ではないし、地図の見方だって分かる。

でも訳が分からないうちにこうして走っているから、どこへ向かっているのか見当がつかないでいた。

まさか連れて行かれる場所が、彼所有のペントハウスとは思いもせず。

到着した瞬間に、呆然とそのマンションを見上げることになると思いもせずに・・・・・・。

そうして、到着した高層マンションを見上げて、あたしは口をあんぐりあけていた。

営業部での元上司にして、今では専務にまで上り詰めたこの男・・・・・・・いったい何者なのだろう。

「ほら、行くぞ」

右腕を取られて、半分引き摺られる様にエントランスをくぐる。

『あ、あの！専務！いったいここは？』

「ん？俺んちだけど？」

何か問題でも？

そんな顔つきであたしを見下ろした。

問題大有りでしょ～～～～～～～～！！！！！

そんなあたしの心の叫びは、このあと完璧に無視されることになる。

エレベーターが到着したのは最上階で、その階には当然のようにドアは１つだけで。

『な・なんで専務のご自宅なんですかぁ・・・・・・』

「なんでって、連れて来たかったから？」

『意味がわかりませぇん・・・・・・・』

「意味なんて、そのうち分かるよ。おいで、綾乃」

『な・・・・なんで呼び捨て・・・・・・』

「いいから入って。ここじゃ近所迷惑だろ？」

『一部屋しかないじゃないですかぁ～～！！！！！』

そう叫ぶも、無理やり部屋の中に引き込まれてしまった。

部屋のインテリアは、高級ではあるのだろうがシックな色合いで落ち着きのあるものだった。

ベージュとブルーが基調で、そこに黒系の物が配置されている。

『行き先がご自宅ならご自宅とおっしゃってください！』

そうすればここまで緊張せずにすんだのに・・・・・そうぶつぶつ呟く。

「自宅だなんて言ったら、それこそ来ちゃくれなかっただろ？」

『む・・・・・・確かに』

自宅なんて分かってたら、絶対に外出する準備なんかしちゃいない。

のんびりマッコリを口にしながら、自宅での休日を満喫していたはずだから。

1章　4話

『それで？なんの御用であたしをここに？』

そうここに来てかれこれ１５分。

専務の名前は・・・・・高槻亨（タカツキ　トオル）という。

その高槻氏が入れてくれたコーヒーを飲みながら、もうかれこれ１５分経つのである。

「ん？だから綾乃と休日を過ごしたいと思ったからさ」

『そして、なんで呼び捨てになるんです？』

「俺がそうしたいから」

『どうしてそうしたいんですか・・・・・』

少々投げやりな気分で聞いてみる。

「綾乃を俺のモンにしたいから？」

『は？』

「聞こえてただろ？ちなみに連休中、帰す気ないから覚悟して？」

『・・・・・・は？』

突如我が家に訪れた専務によって、どうやらあたしは囚われの身になったらしい。

「着替えも化粧品も揃えてあるから、安心してここにいればいいよ？」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・いや・・・・・・安心できる輩がこの世のどこにいるのでしょうか。

囚われの身なのに、安心なんて出来るわけないでしょうが！！

「ああ、俺のことは役職で呼ばないように。亨って呼ぶこと」

『無理ですぅ・・・・・・』

「平気平気。すぐに慣れるからね」

にっこり笑ってそう言った。

あたし、いったいどうなっちゃうんだろう。

このさわやかな笑顔を見せるこの男に、何をどうされてしまうんだろう。

『それにしても、なんで突然こんな事なさるんです？』

そう、そもそもの疑問はそこ。

なんでこんな目にあうのかが分からない。

「まあ確かに君にとっては突然だったのかもしれないけどね。俺にとっては突然じゃない」

『は？』

「気付いてもいなかったってことか？営業部時代から、俺は君しか見ていなかったっていうのが理由だ」

気付いてもいなかったってことか・・・・・ですって？

あたしは元夫の残した借金清算に向けて必死で働いてたのよ？

そんなの気付くわけないじゃないの～～～～！！

『ありがたいお話ですけど・・・・・・・でも今のあたしにはそんな暇もありませんし』

「元のご主人の残した借金？」

『ご存知なんですか！それなら・・・・・』

「それ、俺が全部立て替えるって言ったら？」

『・・・・普通に考えれば美味しい話かもしれませんけど、そんな気は・・・・・』

「っていうか、もう問い合わせて支払い済み」

『・・・・・・・・・・・・・・・・・・はい？』

意味が分からない・・・・・今、なんて？

あいつが残した借金を、専務が払い終えた？

正直、あたしはマンションを見上げた時よりももっと、開いた口がふさがらなかった。

1章　5話

『な・・・・・・なんでそんな勝手なことを！！』

１０００万あったけど、司法に頼んだりして今の残金はおよそ半分。

あと3年頑張れば、きれいさっぱり出来たはず。

勝手すぎる！

「確かにあと2・3年頑張れば清算できたんだろうけど、その間ずっと綾乃は元のご主人に縛り付けられたままだろう？俺はそれが我慢できなかったんだ」

『だからって代わりに払う必要はないじゃないですか！！』

「それで3年くらいの間待てって？そんなのもう待っていられない」

まっすぐな視線があたしを射抜くかのように、すべてを絡めとられていく感じがした。

「綾乃・・・・・俺が何年お前をみてたと思うんだ？」

あたしが短大を出てから入社して7年。

結婚しても、離婚をしても・・・・あたしはこの会社に勤めてきた。
専務が営業部から離れて４年・・・・・・それまではずっと彼の部下だった。
『そんなの・・・・・知るわけがないじゃないですか・・・・・・・・』
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・7年だよ」
『え？』
何か信じがたい言葉を聞いたような気がする。
「7年と言ったんだ。綾乃が営業に来てからずっとだ」
『え？だってあたしはその間に結婚もしてますよ？』
「ああ、そうだな。でも諦めることが出来なかったんだから仕方ないだろう？」
『・・・・・・・・・・・・・・・・・・』
あたしが腰掛けていたソファーの隣に腰を下ろすと、あたしの手からコーヒーカップを取り上げてテーブルに置く。
「俺のこと、嫌いか？」
『・・・・・・そんなことはありませんが・・・・・・・』

「じゃあ・・・・・・俺を受け入れて？」

あたしの手を取るとちょっと強く引いて、あたしは専務の腕の中に飛び込む形になった。

『せ・・・専務・・・・・・あの・・・・・』

「亨。もう誰にも渡さないから・・・・これ、決定事項だからね」

『いや、でもそれは・・・・・・』

「綾乃に今付き合っている相手がいないのは分かってるよ。だから拒否は受け付けないよ」

『お、横暴です！』

「横暴でも何でも、綾乃が欲しかったんだから諦めて」

そう言うとさも嬉しげな表情を浮かべて、あたしを抱きしめた。

2章　1話

離婚から3年、初めて会った時の匠は４歳で結婚生活はおよそ1年半。

１2月生まれだった匠は、今はもう9歳になっているはず。

元夫のすぐ上・・・・と言っても１３歳上の義姉から電話が入ったのは、専務が纏わりつきはじめて2ヶ月あまり経った頃の昼休み中。

「匠がね・・・・・お母さんのとこに行くって家出したんよ・・・・。いっとらんよね？」

『は？だってここの住所は知ってるんですか？』

「うん、あの子はうちで育てとったし、手紙も見せとったから・・・・」

『は？育ててって・・・・・あいつは？』

「あいつがいつまでも、こんな田舎におると思うとったん？とっとと出てったわ」

『・・・・・・・こっち来たら刺しますよ、あたし・・・・・・・』

「ああ、そんくらいせんと、分からんやろね・・・あんバカは」

『で、匠はいつ？』

「今朝早よう出てったらしいわ・・・・貯金とか有り金全部持って」

主要新幹線乗り場のある駅までは、最寄り駅から1時間はかかる。

そこから新幹線に乗ったとしても・・・・・。

『早くても夕方・・・・・・』

3年ぶりの匠を捕まえたのは、すでに暗くなった午後7時のこと。

一緒に専務もついてきた東京駅。

そこで受けた保護通知連絡で、やっと居場所がわかったのだ。

『匠・・・・・・』

「・・・・お母さん！！」

飛びついてきた匠を抱きかかえて、職員の方にお礼を告げる。

幸い無賃乗車をしてきたわけではなかったのだが、まともに食べてなかったらしい空腹を訴える匠を連れてレストランに向かった。

『匠、こんな遠くまでよくもまあ一人で・・・・・無事に着いてほっとしたわよ』

「ごめんね・・・・お母さん」

『謝るのはおばさんにでしょ？心配して連絡くれたんだから」

「うん分かってる」

『でも急にどうしたの？』

「・・・・・・僕、お母さんと暮らしたいって思って出てきたんだ」

『え？だってお母さんは・・・・』

「うん、僕の本当のお母さんじゃないんでしょ？分かってる。でもお母さんがいいんだ・・・・・」

『とにかくそれはおばさんたちとよく話してからね？勝手には決められることじゃないのよ・・・・・ごめんね』

「うん、でもそれまではお母さんのところにいてもいいでしょ？」

『ん？ああ、いいわよ』

一緒に来ていた専務は、黙って話を聞いていた。

「ところでお母さん。このおじさん、誰？」

黙って話を聞いていた専務のほうを向いて、匠がそう聞いてきた。

『ああ・・・・・・お母さんの会社の専務さん・・・・・・』

若干しどろもどろになりそうになったけれど、やっとそれだけ口にする。

「違うだろ？綾乃・・・・・・。確かに俺は専務でもあるけれど、君の婚約者でもあるだろう？」

『こ・婚約？』

そんな話は聞いてないぞ！！

「はじめまして・・・・・匠君。君のお母さんと結婚する高槻亨です。よろしくな」

にっこりと笑って、匠を見つめた。

「ふーん、そうなんだ。でも僕がいるけど、おじさん平気？」

「ああ、君の一人や二人、全然いてくれて構わないよ」

「そう？なら良かった。これからよろしくお願いします」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・勝手に話を進めるなってば・・・・・・・。

あたしは完全に、その時絶句していて話の輪には加われなかった。

2章　2話

元義姉に連絡を入れると、さすがにびっくりしていた。

無事に着いたことには安堵したのは確かだが、まさか1年半の間ずっと一緒に暮らしていたわけでもない義母であるあたしと暮らしたいと言い出すとは、夢にも思わなかったことだろう。

頼ってきてくれたのは嬉しいが、元夫がなんと言い出すかが問題だった。

たった一人での長旅で疲れたのだろう匠は、食後に車の中で寝てしまった。

一緒に来てくれた専務が、匠を部屋まで運んでくれた。

『お世話になっててなんですけど、さっきのってなんなんですか？』

「さっきの？」

『結婚とかって、あたしはプロポーズされた記憶ありませんし。OKした記憶ももちろんありません』

「何を言ってるんだ。俺を受け入れるって事はそうゆうことだろう？」

『・・・・・・受け入れるとは・・・・・・』

「拒否は認めないって言ったろ？」

『どこまで俺様なんですか！』

そんなプロポーズ、元夫ですらしてないわ！と、憤りを感じてしまう。

それに付き合いもせずにいきなり結婚だの婚約だの、さすがにあたしもそれは困る。

『専務・・・・・・』

「亨だ」

『・・・・・「亨」さん。あたしは、お付き合いすらもしていないのに、結婚だの婚約だのは出来ませんが』

「何言ってるんだ。俺は7年も待ってたんだぞ？」

『ええ、そうですね・・・・・・・・・・・・・・・勝手に・・・・・・』

そう小声で呟く。

「・・・・・・・・・・・・・・・聞こえてるぞ」

けっ、地獄耳め・・・・・・と、今度は心の中で呟いて、顔だけ顰めてみせる。

「ところでな、匠君だけどな・・・・・・彼の家族がいいと言うなら、君の養子にしてもいいんじゃないか？俺は一向に構わない」

『義妹が・・・・きっと許さないでしょうね。離婚の時もあわせてももらえませんでしたし、電話しても替わってもくれませんでしたから』

「そこのうちで育てられたわけじゃないだろう？」

『ええ、義姉のところです』

「この週末にでも行って話し合ったほうがいいだろうな。俺も一緒に行こう」

『いえ、そこまでしていただくわけには』

「俺の将来にも関わってくるからな」

『・・・・・ですから・・・・・・！』

「聞こえない」

ほんと都合が悪くなると耳を塞ぐタイプだったなんて、今まで気付かなかった！

上司として仕事を教わっていた頃は、こんな人だと思わなかったの

に。

ぐっすり寝込んでいる様子の匠を見やって、短い溜息を1つつく。

来週顔を合わせるであろう、義妹の顔も頭の中でちらつく。

それもまた溜息を誘う1つの要因だった。

2章　3話～亨side　1～

新人研修のあと、俺の下に配属された新人は2人。

一人は大卒の男で、もう一人が綾乃だった。

彼女は大卒ではなかったが、もの凄く努力をして営業成績を上げつつあった。

「せっかくの週末なのに、彼氏に怒られないのか？」

2年目にもうすぐなるという頃、相手のいるやつはそそくさと帰っていく金曜日。

綾乃はというと、もう既に10時になろうとしているのに、まだPCに向かって資料を作っていた。

『ああ、平気です。里帰りとか言って、今頃は西日本の片隅ですから』

「そうか。そりゃ、寂しいな」

自分で振っておいて、何故か胸の奥がチクチクと痛みを持つ。

『ん～・・・・・それがそんなでもないんですよね（苦笑）あたし、感情が冷めてるみたいで』

もしかしたら彼女は、相手とあんまりうまく行ってないのでは・・・・・そう考えるとなんだかホッとするものを感じてしまう自分に気が付いた。

「まあ、あんまり無理するなよ？ところで、あとどれ位かかるんだ？そろそろ１０時になるぞ？」

そう言うと、時計を見上げて目を見開いた。

『え、もうそんなになってたんですか？うわ～、また夕飯食べ損ねた！』

「高木、実家じゃないだろう？」

『はい、違いますよ？ちょっとマンションからは離れてますけど、海の傍で従兄が奥さんとサーフショップとカフェをやってるんです。なので、暇な週末はそこで食事することが多くて』

「そうか・・・・じゃあ終わりそうなら夕飯奢ってやるぞ？」

『ほんとですか？やった！！もう終わりなんで、急いで片付けます！』

「じゃあ、外に出たところで待ってるから」

『はい！』

その日、俺は入社以来必死に突っ走っている綾乃に、自分が惹かれ始めているのに気が付いた。

でもその気持ちは、伝えることはなかった。

どんな関係であっても、彼女には相手がいるわけで。

今伝えてしまえば、綾乃を悩ませるだけだと分かっていた。

そんな事はしたくなかった。

でもその時の判断が、後々後悔の元となる。

綾乃は半年後、その相手と入籍をしてしまったからだ。

そして自分自身営業を離れることになり、寿退社する予定のないという綾乃とは社内でも極たまにすれ違うのみになってしまった。

2章　4話～亨Side　2～

時々社内で見かける綾乃は、いつも溌剌としていていつも「主婦らしさ」を見せることはなかった。

実際は週末婚ってやつだったようで、平日は一人暮らしのままだったらしい。

そんな彼女の様子がおかしくなり始めたのは、結婚後2年ほどしてからだった。

とにかく仕事がすべてだとでも言うように、平日も週末も仕事仕事の毎日で。

離婚して、しかも相手の残した莫大な借金を抱え込むことになってしまったらしい。

・・・・・何かしてやりたい。

でも、押し付けるわけには行かないし、綾乃の現在の状況を知っておいて困ったことになったら助けよう・・・・・そう決めた。

日々仕事に邁進して、成績もよく・・・・・同期の男なんか足元に

も及ばない。

入社して４年目には、大きなプロジェクトにも参加した。

それには俺もかなり関わっていて、綾乃と接することもまた増えていった。

毎日のようにミーティングで顔を合わせ、意見交換をした。

そのプロジェクトが成功し、俺は専務になり、綾乃は営業部の主任になっていた。

女性はどうしても出世しにくいから、仕方がないのかもしれないが・・・その分、大きなプロジェクトにはよく関わっている。

俺も年齢的なこともあって、アレコレと縁談が持ち込まれた。

一応相手や紹介してきた上司や取引先の顔を立てて、見合いまではこなすようにしていた。

でも、それでも・・・・・綾乃以上に惹かれる女性に出会うことはなかった。

見た目だけなら、綾乃以上の女性もいた。

でもそういった女性はあまり仕事への理解もなく、自分を優先してくれることを望む。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・俺はそうゆう女は、冗談抜きで嫌いだった。

自立していて、仕事上でも輝いているかのような綾乃のような女のほうが好きだ。

というより、諦め切れていないのが真実だったが。

綾乃が２０歳で入社してきた時、俺は２７だった。

それなりに欲望だってあったし、でも他の女で紛らわせるよりやっぱり綾乃が欲しいと思った。

その代わり、手に入れたら・・・・・・・・そのことだけを考えようと決めた。

でも結局、何年経っても隙が出来ない。

仕方なく、自分から動いたのは7年目。

彼女の頼んだ司法関係者に、自分の友人の弁護士を通じて連絡を取り、残っていた負債をきれいさっぱり清算した。

残っていたのは、およそ４００万。

それを綾乃に知らせたのは、連休初日に綾乃のマンションを訪ねたときのことで。

めんどくさそうに出てきた綾乃は、微かにアルコールの匂いがした。

部屋に入ってみると、昼間から飲んでいたのか・・・・テーブルにグラス半分くらい残ったものがあった。

それだけでも、今は特に誰もいないのは分かる。

じゃあ、俺の付け入る隙もあるだろう。

いや、7年も待っていたんだから・・・・・・今度こそ手に入れる。

少しくらい強引な手を使ってでも、きっと許してもらえる。

俺は綾乃以外は要らない。

だから、今から本気を出すから・・・・・・綾乃、覚悟しろ？

呆れたような・・・・いや、あれは『何言ってんだ？こいつ』って顔か？

ひたすら耐えてきた7年が一気に面白いものに変わったようで、俺はきっと意地の悪い笑顔を見せていたんだろう。

2章　5話～亨Ｓｉｄｅ　3～（前書き）

ラストでほんの少しだけ性描写につながる表現があります・・・・
ほんの少しだけ。

2章　5話～亨Side　3～

嫌がる綾乃を無理やり自宅のマンションに連れ去ると、まず綾乃がしたことはマンションを見上げてあんぐりと口を開くことだった。

エレベーターに引きずり込み、最上階に降り立つと更にごねた。

鍵を開けて、騒いでいると近所迷惑だから入るように言う。

『一部屋しかないじゃないですかぁ～～！！！！！』

そう怒りの声をあげる。

む・・・・・確かに。

ここの階には俺の部屋しかない。

でも、そんな事は構わず、手を引いて部屋の中に引き入れる。

なんやかんやと抵抗していたけれど、俺は7年待ったんだ・・・・・

もう限界。

この連休は、二人っきりで過ごすことに決めていた。

綾乃が好んで使っている化粧品も買って揃えてあったし、それは着

替えも同様。

彼女が愛用している香水も、バッグもリサーチ済みで買い揃えてある。

だから着の身着のままでこうやってつれてきても、不都合はないに等しい。

そして、その夜・・・・おれは長年の想いを遂げた。

ちょっと卑怯な方法ではあったかもしれない。

夕食を食べながら、ワインをあけた。

俺が好んで飲んでいたハンガリー産の赤だった。

普段赤ワインはあまり飲むことはないようで、食事のあとはちょっとほろ酔い加減だった綾乃。

食後に別のワインを出してきて、二人で飲みながら営業部時代の話を色々していた。

こっちは綾乃もかなり気に入った様子で、ボトルを手にしてラベルを見ながら『これ、なんて読むんですか？』と聞いてきた。

「トカイ・アスー・エッセンシアだよ」

トカイはハンガリーの貴腐ワインで、手軽な3プトニョスから上質で糖度も高い6プトニョスまである。

エッセンシアは6プトニョスより上質で、あまり入荷することがない。

まさに天候次第ということだ。

度数はそんなに高くはないが、もう既にほろ酔いだった綾乃には効いたらしい。

・・・・・・・・・・・・まあ、昼間っから飲んでたしな。

だから・・・・・・うまくチャンスを物に出来たと思う。

姑息な手ではあるけるど、綾乃をこの手に抱くことが出来たんだから。

「綾乃・・・・」

『・・・・・ん・・・・・・・ふ・・・・・』

何度も角度を変えて、綾乃の唇に自分のそれを重ねた。

そっと下唇に舌を這わせると、うっすらと開いたところに舌を滑り込ませる。

甘い彼女の舌を絡め取り、その行為を堪能する。

零れた唾液を舐め取り、嚥下する。

・・・・綾乃はどこまでも甘く、もう2度と手放すことは叶わないだろうと思った。

2章　6話～亨Side　4～（前書き）

※前半に若干、少女コミック程度の性描写があります。
ご注意ください。

2章　6話～亨Side　4～

「綾乃・・・・・・愛してる・・・・・・」

決して色白ではない綾乃の、それでも滑らかな肌の上に舌を這わせていく。

首筋から鎖骨、胸のラインを通り過ぎて腹部に達する。

ベッドに縫い付けるように組み敷いた綾乃は、俺の下で啼き声をあげ続ける。

しつこく繰り返す愛撫に、綾乃のソコは濡れそぼっていた。

「・・・・洪水だぞ？そんなに気持ちいいのか？」

そして俺は、あえて何もつけずに綾乃の一番奥まで入り込み突き上げ続けた。

その連休は宣言通り、綾乃をベッドから放すことはしなかった。

2ヶ月あまり経って、その関係が変わった。

綾乃の前夫の息子が家出をし、「お母さんと一緒に暮らしたい」と綾乃を訪ねて来たからだ。

「このおじさん誰？」

そう言われた時に、とっさに婚約者だと名乗った。

プロポーズもしてないのにと、綾乃は目を剥いた。

・・・・・・・・・・・・確かにしてないな・・・・・・。

でも結婚する気満々なんだから構わないだろ？

「僕がいるけど、おじさん平気？」

そう聞かれて、俺は即答した。

「ああ、君の一人や二人、全然いてくれて構わないよ」

本当にそう思っているから、あっさりと答えられた。

勝手に話を進める俺たちの輪に入り込めず、右往左往している綾乃の様子が面白かったけどな。

とりあえず匠を育てていた義姉だと言う人に連絡を取り、近々訪ねる事になった。

でも匠の希望を叶えるには、義姉よりも義妹が鬼門らしい。

その義妹がどんな女なのか興味があり、話し合いについていくこと

にした。

「どんな人なんだ？その義妹ってのは」

顔をしかめたままの綾乃に聞いてみた。

『・・・・・一応、長男の嫁ですけどね。匠の１つ下の娘が一人いますよ。でもすっごい我侭で・・・・・』

「我侭？」

『ああ、はい。我侭というか、ご意見番というか。とにかく威張ってますね。だから離婚の時も、匠に会うことを拒否されたんですもん」

「そこの家で匠君が育ったわけじゃないだろう？」

『ええ、違います。年の離れた義姉の家ですよ。それと・・・・・』

綾乃が言いかけて口ごもる。

それは思いも寄らぬ事実だった。

3章　1話

『実は、専務が・・・・・』

「亨だ」

『亨さんが立て替えてくださった彼の借金、一部は義妹の舞のものなんです』

「・・・・・・は？」

『彼、バカなんですよ。田舎を出るときに舞に世話になったらしくて・・・・・引き受けちゃってたんです・・・・保証人』

「それで払えなくて？」

『そうゆうことになりますか・・・・』

「・・・・・いくらあったんだ？」

『ん～・・・・・・３００くらいですか』

「その明細はとってあるのか？」

『当たり前じゃないですか。最初の頃に支払ってたものなんで、司法も入ってませんでしたから。支払い明細もとってありますよ』

「そうか。じゃあ、あちらに出向く時には必ず持ってきてくれ。忘れるなよ？」

『ああ、はい・・・・わかりました・・・・・。っていうか、何であたしが言いなりにならないといけないんです？』

「俺の未来もかかってるからな」

『意味分かりませんけど』

何か思惑がありそうな専務の顔を見つめる。

「何だ？」

『いえ、何を考えてるのかなって思いまして』

「巧君を君が引き取るのに、有利な策を練ってるのさ」

『・・・・なんか腹黒く見えますけど』

「腹黒・・・・・・失礼なやつだな、君は」

でも確かに、彼に任せたほうが有利に進むのかもしれない。

義姉はよくしてくれはしたんだろうが、それでも居場所がないと感じていたんだろう。

匠の希望を叶えてやるには、そうするのが一番だと思った。

数日後、匠を伴って新幹線に乗った。

もちろん、亨さんも一緒だ。

ここ数日で、ふたりは意気投合していた。

着替えを買いに出かけたり、食事をしたりだけでなく、一緒にゲームをしたりＤＶＤを見たりもしていたからだろうか。

仕事に出ている間は、彼が頼んでくれた人がいたおかげで安心して勤務できた。

残業もせずに済んだし、今後も匠が一緒に暮らすならばあまりしなくてすむようになるだろう。

あとは・・・・・義姉妹との対決だけだった。

新幹線から在来線に乗り換えたのは、東京を出てから何時間後だったろうか。

だんだんと緊張が高まっていく。

「お母さん、大丈夫？」

心配そうに覗き込んでくる匠に安心してもらうためにも、あたしは笑顔を見せた。

3章　2話

「何、あほな事言うちょるん？匠とは血ぃも繋がっちょらんでしょうが！」

案の定、匠の希望を話し出したあたしに向けて飛んだ、舞の罵声。

やれやれ・・・・・・と、義姉の恵津子が溜息をつく。

「あんたはだまっちょきんさい。話がややこしくなるけぇね」

『姉さんは・・・・どう思いますか？いままで育ててきたのは姉さんですし』

「あ～、そうやねぇ・・・・・。面倒とかそうゆうんではないんやけど、匠を進学させてやるんは難しいしねぇ・・・・・」

義姉の家には、元夫との間に高校生の息子がおり、その下には今の夫との間に匠の１つ下の娘がいる。

「義理の仲やゆうても、こうして慕っちょるしねぇ・・・・・。それにこっちにおるよりは、進学も就職も色々希望があるやろうし・・・・」

「な！じゃあ姉ちゃんは、匠を東京のこの人んとこにやるっちゅうの？どうせ借金まみれになっちょるし、邪魔になったら放りだすじゃろうが！」

「舞！」

・・・・どうせ借金まみれになってる？

確かになったよ・・・・・あんたの兄のおかげで・・・・・・。

でも、なんで舞が知ってるの？

「あの・・・・・少しよろしいですか？」

黙って聞いていた亨さんが、ふいに口を開いた。

「舞さん。借金まみれとは、あなたのお兄さんの残したものの事ですか？」

「え？な、何よ、あんたには関係ないやろ！」

「関係ありますよ。僕は彼女の上司であり婚約者だ。それに綾乃が払ってきた借金の中には、舞さん、あなたが貴史さんに押し付けた３００万も含まれている。しかもそれは既に、完済しています。彼女がそれだけ必死に働いてきた結果だ」

「舞！あんた、なんちゅうことしとるん！」

「姉ちゃんには関係ない！兄ちゃんが勝手にやったことなんやし！」
「兎に角、あなたは借金まみれなどと愚弄できる立場にはない。なぜなら、舞さんの３００万以外のすべてを、彼女は返済し終えている」
「え？」
・・・・・・・・・・・・・・・確かに終わってるけど・・・・・・・亨さんが払ってくれちゃいましたから。
ほらそんな事言うから・・・・二人とも開いた口がふさがらないって感じになってるよ。
「ねえ、舞おばちゃん。本当のお母さんじゃないと、一緒に暮らしちゃいけないの？」
『匠・・・・・・』
「だってさ、そうしたらえっちゃんおばちゃんとこの善兄ちゃん、僕と同じでお父さん違うやろ？」
義妹のほうをまっすぐに見つめて、匠がそう話す。
「それに、えっちゃんおばちゃんと、お父さんも舞おばちゃんもお父さんが違うやろ？僕、知っとるんよ？」
「あんた、それ誰に聞いたん？」
「善兄ちゃん。ばあちゃんにも前に聞いたけど」

「・・・・・・・・」

「兎に角、おばちゃんたちが何て言おうと、お母さんのとこ行くつもりやし。邪魔せんとって」

その日、貴史には連絡が取れはしたものの会う事が出来ず、市内の大きなホテルの宿泊することにした。

この町は、最近合併で郡から市に変わったばかりで、もともとの市のほうは観光地にもなっている大きな街だった。

その市内を流れる川縁で、花見をするのが気に入っていたことを思い出す。

川沿いに桜並木があり、毎年花見客で賑わうのだ。

まだ4歳だった匠を連れて、1度来たことがあった。

あのままここで暮らしていたら、毎年足を運んでいたのかもしれない。

それは叶うことはなかったけれど・・・・・。

3章　3話

結局、翌日も貴史は連絡も取れなかった。

どうやら、最近付き合い始めたらしい女の部屋に入り浸りなようで、あたしとしたら【やっぱり】って感じで。

『貴史が、もう女作らないなんて１２０％有り得ないものね。想定内のことだから驚きもしない』

でも自分の息子のことなのに・・・・・それを考えると憤りを感じぜずにはいられなかった。

あたしたちにもタイムリミットはあるわけで、これ以上待つ時間はなかった。

『お姉さん、やっぱり匠は希望通り連れて行きます。それで、貴史に連絡が取れたら、１９時以降こちらに連絡するように言って下さい』

学校のほうは貴史の同意がないと転校させられないし、しばらくは亨さんの頼んでくれた人が勉強も見てくれることになった。

「お母さん！お帰り！」

『ただいま、今日は何してたの？』

亨さんの計らいで、少しだけ早めに帰宅できるようにしてもらっている。

こちらに転校すれば、もう少しましなのだろうが・・・・まだ貴史からの連絡はない。

どれだけ子供に対して無責任なんだろう・・・・・まさにこれって育児放棄でしかないと思う。

結局貴史と連絡が取れたのは、それから４日後のことだった。

「あー、俺。なんか匠の事で話があるって聞いて」

『今までどこで何してたん？散々留守電も入れたはずでしょ！』

「あー、悪い悪い・・・・・。女んとこおった・・・・・」

『もう女はいらんとか言ってたのは、いつの事でしたかね』

「まあなぁ・・・・・でも女がおってくれ言うし。そんで？匠がどうしたん？」

『東京に来たいそうなんだけど。っていうか、もう来てるわ』

「へ？姉ちゃんとこにおるんじゃないんか？」

『家出してこっちに来たの！一度話し合うのに連れて行ったけど・・・・肝心のあんたがいなかったのよ！』

どんどん苛々がつのる。

「そっかぁ？まあ、匠の好きなようにすればいいんじゃね？」

『そう。じゃあ好きにするから。いずれは養子の話も出るかもしれないから覚悟しといて』

「おお、まあその時はその時だろ。匠がしたいようにしてやってくれればいいから」

『そう、分かった。じゃあその話が出たら連絡します。学校の書類は早急に送って頂戴』

「分かった。じゃあな」

あっという間に切ってしまった。

匠に一言くらい、そう思ったがそれすらもなかった。

本当にあっけなかった。

それでも翌週届いた書類で、匠は近所の小学校に転入することが決まった。

元来の明るさで、初日から友達も出来たようで、楽しそうに通い始めたのが救いだ。

学校の近くに、２ＬＤＫの部屋も借りて引越しも済ませた。

亨さんは匠の通学に合わせて、シッター兼家庭教師を頼んでくれたので夕方以降も安心だった。

あたしは心配事も減ったおかげで、時間短縮はしているものの集中して仕事に取り掛かれるようになった。

3章　4話

「やあ、匠君。久しぶりだね」

その夜、突然訪ねてきた亨さん。

手にはなにやら紙のショッピングバッグを持っている。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・しかも某大手電器店のものだ。

「あ、亨おじさん！いらっしゃい！それってもしかして・・・・・」

「うん。約束のゲーム機とソフトだ」

「やった～！！ありがとう！ねえ、いっしょにやろうよ！」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ゲーム機？約束の？

そんな話は聞いていない。

『匠。亨さん・・・・・・いつの間にそんな約束してたんですか？聞いてませんけど』

「お母さん、固い！男と男の約束なんだからいいんだよ！」

「そう。男と男の約束だったからな」

『む・・・・・・・・・そうですか。じゃあ、匠、夕飯はおじさんと二人で作って食べてくださいね』

「え～！それは無理！」

「悪いが俺も無理だ・・・・・・」

亨さんは外食か買ってきたもの、もしくは週に3日来ると言うお手伝いの方の作ったものを食べている。

匠同様、まともに作れるものはないのだと思う。

渋々と言った感じで、この間話し合いのために、匠と出かけたときに約束したのだと言った。

『まったく・・・・・・二人とも、内緒にするのは金輪際やめてくださいね。じゃないと、本気でストライキ起こしますよ！』

夕飯を済ませ、宿題も終わらせた後1時間だけの約束でゲームを始めた匠。

その背中を見つめ、これからのことを思案する。

「大丈夫。匠君には君だけじゃない。俺もいる・・・・・」

『ありがとうございます・・・・でも・・・・』

「でも・・・は聞かないよ。俺は綾乃を手放す気はないし。匠君がいようが・・・それは変わらない」

『本気で言ってるんですか？匠はあたしにとって息子ではありますけど、血縁はないんですよ？』

「養子縁組したと思えばいいんじゃないか？俺は自分の子供が出来ても、わけ隔てなく育てていく自信はあるよ？」

『それはあたしも同じですけど・・・・・・・でも・・・・』

「まさか一生一人でいるつもりじゃないだろう？だったら俺で手を打ったら？」

『・・・・あっさり言いますね・・・・・』

「踏ん切りもつける時期は必要だろ？それにもう、何もない関係じゃあないんだし？」

『な・・・・・・・』

「本当のことだろ？」

焦ったあたしを見下ろしつつ、目が妖しい揺らめきを見せた。

「お母さんと亨おじさん、本当に結婚するの？」

突然、ゲームをしていたはずの匠の声がこちらに向かって発せられ

た。

『え？や・・・・あの・・・・・』

「匠君・・・・・」

ゲーム機を持ったまま、リビングに座り込んでいる匠の方へ、亨さんが歩み寄っていく。

「匠君・・・・・・。お母さんと真剣に結婚したいと思ってるんだ・・・・だめかい？」

そう静かに、でも真剣に匠に向かって問いかけていた。

3章　5話

「僕がいて、邪魔やないんだったら・・・・別にいいんやない？」

にっこりわらってそう言った。

「だってお母さん、お父さんみたいなやつと結婚せんかったら不幸にならんかったんでしょ？まあ、おかげで僕がここにいられるんやけど」

チラッとあたしを見て、すぐに亨さんに目を向ける。

「そのお母さんが幸せになれるんやったら、僕は反対せんよ」

『匠・・・・・・・』

・・・・・なんだか勝手に結婚話が進んでいく気がするのはなぜだろう。

確かに亨さんとは・・・・なし崩しに関係は持ってしまった。

何かと優遇してくれるのにも、すっかり甘えてしまっている。

でも、肝心のあたしの気持ちは・・・・・どうなのか自分でもあん

まり分かっていないんだけどな・・・・・・。
嫌いなのかって聞かれれば違う。
きっと、好きなんだと思う。
じゃあ、愛してるかと聞かれたら・・・・・・・・・どうなんだろう。
このところすべてが怒涛のように進んでいくので、はっきり判断できていないのだ。
「まあ、でもさ。お母さんもまだ迷ってそうだし？亨おじさんの勝負はこれからっぽいよ？」
「ああ、まあそうだな。頑張るから応援してくれよ？」
「うん、勿論」
『ちょ、ちょっと！そこで団結しないでよ！』
「じゃあ、お母さんも迷ってないで、さっさと決めたら？」
『ぐ・・・・・・・・・』
くそー、子供のくせしやがって！！
男同士で勝手に団結しやがってーーーーーー！！！！！！
「とりあえず、今夜から迫るからよろしくな、綾乃」

『き、却下です！！』

「却下は聞かないよ」

頑張って・・・・・そう言って笑いながら自分用に宛がわれた部屋に、お土産のゲーム機を抱えて入っていく匠。

「頑張ってだってさ」

『賄賂なんか与えてずるいです！』

「賄賂じゃないよ。あれは約束の品だ」

『でも賄賂になってるじゃないですか！！』

「いいから・・・・・もう黙って・・・・・」

そう言うと、あたしの腰と後頭部をがっちり押さえ込むと、深く深く唇を重ね合わせた。

『んん・・・・・・』

「・・・・・愛してる・・・・・」

角度を変えて、何度も何度も唇を重ね、舌を絡み合わせる。

思う存分、あたしの口内を蹂躙しつくしながら、背筋に沿ってさするように手を這わせていく。

そしてあたしはというと、その深いキスに翻弄され・・・・いつしか体の力が抜け切ってしまった。

その体をすっかり亨さんに預けて、いつしか彼の愛撫を受け入れ始めていた。

3章　6話

『こんなに分かりやすいところにつけるなんて！』

翌朝、出勤するために着る服に困ってしまった。

匠の朝食を用意するときは、ジムに行ったりする時に着るトレーニングウエアをきていたから誤魔化しが効いた。

昨夜は深夜になっても離してもらえなかった。

深夜どころか・・・・・離してもらえたのは明け方近かったのではなかろうか。

『ハイネックなんてないから、スカーフでも使うしかないわね・・・・・』

その所有印をつけた本人は、学校に行く匠と一緒に部屋を出て着替えるために帰宅した。

コンシーラーでも隠れない、濃度を持ったその印。

『はぁ・・・・・・・』

普段スカーフなんか殆ど使わないあたしが使えば、出社した途端に何がしか言われることだろう。

「お？どうした？高木。珍しいじゃない、スカーフなんて」

案の定、営業部の三浦先輩がニヤニヤと笑いながら茶化す。

三浦先輩は２つ年上の、かなりさばけた性格の女性だ。

「彼氏にいたずらでもされたんでしょ」

『はあ・・・・まあ、そんなとこでしょうか。彼氏っていうのが、どうなんだかって感じなんですけど・・・・・』

「なによ、彼氏じゃないの？」

『なんていったらいいのか・・・・微妙な感じで』

営業部といっても、毎日外出しているわけではない。

今日は三浦先輩もあたしも、内勤予定でいた。

「昼になったら、話聞かせなさい」

『はい・・・・・』

兎に角、今は仕事に集中しないと・・・・・。

色々自分の営業先に関する書類やデータ処理をしながら、時々嘆息する。

やっかいなタッグを匠と亨さんに組まれてしまったのだから。

それでも黙々と、ＰＣに向かって操作を続けた。

「で？どうなっちゃったわけ？」

『実は・・・・・・・・・・・先輩もよく知ってる人なんですよ・・・・・・・。告白されて、あれこれ助けてもらっては貰ってたんですけど・・・・・なんか息子とタッグを組まれて取り込まれちゃったみたいな感じで』

「はは、匠君だっけ？タッグ組まれちゃったんだw」

『はあ・・・・よりにもよって彼に「頑張って」とか言っちゃってまして』

「で？相手って・・・・高槻専務？」

『・・・・・・・は？』

「何でって顔してるね。悪いけど、営業にいた頃から彼の態度はバレバレだったもの。よく諦めないなぁって感心してたくらいだし。それにうちの連中で、気付いてないのは高木だけだったんだから」

『む・・・・・・・・・』

あたしってどんだけ鈍感だって思われてるんだろう。

まあ、みんなが気付いてたというなら、それなりに鈍感なんだろうけど。

軽く・・・・ショックかも。

「で、どうするの？」

『・・・・どうしましょう・・・・・・・』

「嫌いなの？専務のこと・・・・・・。出世もしてるし、金も持ってるし、見た目だって悪くない。お勧め物件よ？」

『・・・・・・・はぁ・・・・・・・・』

急激に自分の周りが変化している・・・・・もう少しゆっくりだったら助かったのに。

ニヤニヤ笑う三浦先輩の前に座って、また1つ溜息をついた。

4章　1話

『まったく・・・・・・』

みんなが知っていたという三浦先輩の言葉に、本当に溜息が出た。

気付かなかったことを申し訳なく思うだけでなく、自分がどれだけ鈍感だったのかを考えると頭が痛い。

そして、決して嫌いではない彼との未来を考える。

何しろ、考えもしなかった相手なのだから。

意外と俺様だったけど、匠のことではかなりお世話になった。

そして、当の匠もべったりな位に懐いている。

それと・・・・・そっちの相性も・・・・まったくもって悪くはないわけで。

好きだったとは言われた。

愛してるとも言われた。

でも、付き合ってくれとも、結婚したいとも言われてない。
なのに・・・・・匠の件の時には「婚約者」だと言われた。
バツイチだけど・・・・・そうゆう言葉は欲しいものだ。
『どうしよっかなぁ・・・・・・』
朝からミスばかりで、何度も修正を重ねていた。
「高木！いつまでもうじうじ考えてないで、すぱっと言いたいこと言ってきな！」
定時の就業間際、顎をしゃくるように帰宅を促される。
帰宅・・・・といっても、きっと彼はまだ社内にいるはずで。
でもこんなことで、専務室に行くのはいやで。
『・・・・・・・・・・・・・・』
夕飯に呼んで、どうしたいのか聞いてみようか。
これからの彼のシナリオを聞いて、それから決めても遅くはないのかもしれないと思った。
『すいません、今日は先に帰ります』
まだＰＣに向かう三浦先輩や他のメンバーに声をかけると、バッグを手にして部署を出た。

近所のスーパーで買い物をする前に、亨さんにメールを送る。

【 今夜、夕飯を食べにいらっしゃいませんか？ 】

5分ほどして返信があった。

仕事中だろうに、なんとも速い返信だと思う。

【 7時半くらいになるけど、必ず行くよ 】

・・・・そうですか、必ず来るんですか。

まあ自分で誘ったんだし、これからのことも考えたいし。

そう考え直し、買い物を始める。

匠はあんまり野菜が得意ではないようなので、メニューには気を使う。

でも細かくみじん切りにしたり、手間はかかるが分からないようにすれば結構食べられる。

いくつかの野菜は、バーニャカウダにしたら気に入ったらしいが。

そうそういつもバーニャカウダなんて作ってらんないから、今夜はみじん切り方向になりそうだ。

あれこれ考えながら、あたしはカートに乗せた買い物籠に食材を入れ始めた。

4章　2話

たっぷりの野菜は、韓国製のスープメーカーでポタージュにした。

韓国式のおかゆも出来る、優れものだ。

食欲のない時、体調の悪い時、このスープメーカーにお世話になってきた。

野菜の繊維も細かく粉砕されて、最後に調味と牛乳を入れることで栄養たっぷりのスープになる。

ブイヨンを使うことで、野菜の青臭さもない。

これなら匠もきっと飲んでくれるだろう。

メインはトマトソース煮込みのハンバーグだ。

大好きなメニューなら、違和感なく嫌いなものも食べられるはずだと思う。

「お母さん、お腹すいた・・・・。夕飯、まだ?」

『ごめんね、もうちょっと待って。亨さんも来るんだって』

「何時に来るん？」

『ん～？7時半くらいだって言ってたけど』

あと２０分ほどで、その7時半だった。

「そっか、ならもうちょっと我慢する」

結局、亨さんがやってきたのは、7時半を少し回った7時４０分ごろ。

「おじさん、遅いよ～。僕、餓死するとこやった・・・・・・」

『・・・・大袈裟すぎでしょ』

「ほんとだよ！」

『はいはい』

「まあまあ・・・・匠君、遅くなって悪かったな。デザートを買ってたら遅くなったんだ」

『デザート？』

「ええ！何？何？」

「勿論、ケーキだ」

「やったー！」

「その代わり、夕飯をきれいに食べたら・・・・の話だぞ？」

『当然だわ、それは』

「大丈夫！今夜は好きなものばっかだから」

・・・・・・・・・・・・・たっぷり野菜、使ってますけどね。

気が付いてないのは匠だけだ。

凄い勢いでパクパクと口に運んでいく。

気付いた様子はまったくないのが、本当におかしかった。

今夜はコーンポタージュ風だけど、コーンはそんなに入ってないのだ。

ケーキを食べる前に、スープ内容を伝えると唖然としていたのがおかしかった。

食後に匠がお風呂に入りに言った時、これがチャンスだと思ってあたしは口を開いた。

『あの・・・・聞きたいことがあるんですけど』

「ん？」

『あたし・・・・・確かに亨さんに告白はされたし、ベッドも共にした。でもなんで婚約者なんです？』

「・・・・気が早いと言いたいのか？」

『そうじゃないですけど・・・・・・・でも・・・・・・プロポーズはされた覚えないですし、応えた覚えもないんですが』

でもそれが事実だ。

意味も分からず、ただ話ばかりが進行していって、正直戸惑っているのだから。

4章　3話

「・・・・・いやだというのか？」

「・・・・そうは言いません。あたしは多分、亨さんの事を嫌いじゃない。好きなんだと思います。でも、バツイチのあたしでも、きちんと言葉が欲しいこともあるんです』

うん、嫌いじゃない。

多分・・・・・ううん、好きなんだと思う。

匠だって慕ってるし、関係は良好だ。

名前だって、最初は彼の希望からだったけど、いつの間にか亨さんと呼んでいる。

「・・・・気持ちは伝えたはずだ・・・・・」

『ええ、気持ちだけは。だから、お付き合いをするということであれば、それは私も否定はしません』

そう、交際をするというだけなら問題はないのだ。

『でも・・・・・・それなら婚約者というのはおかしいです。あたしはプロポーズされたわけではありませんので』

「・・・・それでも俺は、君を手放す気はない」

『・・・・・じゃあ、きちんとどうしたいのか・・・・・言ってくれませんか？』

「ここの近所に良さそうな物件を見つけた。匠も転校する必要もない。だから・・・・二人揃って引っ越してきて欲しい。君たちと・・・・・家族になりたいと思っている」

『亨さん・・・・・・』

「結婚してくれないか？俺と・・・・・」

『・・・・・』

あたしの返事を待つ間、どんどん眉尻が下がって不安そうな表情になっていく。

その表情が、いつもの自信満々な彼とは別人のようで、おかしくて仕方なかった。

噴出すのを一生懸命堪える。

「・・・・・綾乃？返事は？」

『・・・・・・・・・バツイチですけどいいですか？』

「そんなのは承知の上だ」

『・・・・・・義理の息子がいますけど、構いませんか？』

「匠とはうまくやっていけると思う」

『亨さんに、借金が残ってますけどいいですか？』

「あれは俺が勝手にやったことだ。気にしないでいい」

『・・・・・・・・・じゃあ・・・・・・・・・』

一瞬、目を輝かせる。

『・・・・・・・・・前向きに考えますね』

「・・・・・え？」

本気で情けない顔してるよ・・・・・・・・この台詞は、ほんの出来心なんだけど。

『冗談です。今まで散々、焦らせた罰です・・・・・』

「・・・・・じゃあ・・・・・？」

『・・・・・・お受けします・・・・・』

心底ほっとした顔をしたあと、嬉しそうな顔をしてこう言った。

「絶対に、君たちを幸せにするから・・・・・」

4章　4話

『匠、お母さん・・・・結婚しようと思って』

「亨おじさんと？いいんじゃない？」

あっけない賛同に、こちらとしては複雑な思いだ。

『でも貴史とは違う人が、義理の父親でも平気なの？』

「僕、あの人には育ててもらっとらんし。それよりはおじさんの方がいい」

確かに東京にいる時は、生きてるんだかどうだか・・・・・出てきもしない祖父母に育てられた匠。

あたし達の離婚後は、義姉夫婦に預けられた。

育てられてない・・・・・・・・・匠がそう言うのは当然かもしれない。

『匠もいいそうです』

亨さんにそう伝えた。

この部屋に引っ越してきて、増えたものは匠のもの。

食器なども元々5客ずつ揃っていたし、全部の梱包を解いたわけじゃない。

だから引っ越すのにも、そんなに手間はかからない。

でもここに来て数ヶ月・・・・・なんだかもったいないなぁとも思う。

まあでも、ここに3人・・・・というより、あの体の大きい亨さんまでは無理か。

結局は亨さんの希望に併せて、引越しをしたのは１０日後のこと。

『だから、あたしは豪勢な式はいやですってば！』

「仕方ないだろう。こっちの身にもなってくれ」

『絶対、いやです！』

「なんでそんなに嫌がるんだ！」

何を揉めているかというと、結婚式のこと。

あたしは、出来ればしたくない派で、必要だと言うなら地味婚希望。だけど・・・・でもある亨さんは、出来れば大きなホテルかチャペル派・・・・・最悪、海外でを希望。

「綾乃は前も式は挙げてないんだろう？じゃあ、構わないじゃないか」

『もう匠もいますし、色々複雑なので。これ以上、社内で噂の的になるのは御免です！』

「まだ仕事を続けるつもりなのか？」

『当たり前じゃないですか！』

「それじゃ俺の立場はどうなるんだ！？」

確かに彼は専務という立場だけれど、妻になるあたしが働いてはいけないという謂れはない。

「でもそれでは、営業部も取引先もやりにくいんじゃないのか？」

『・・・・・・・・・・』

「だから俺としては、特に生活に困るわけでもないし、家庭に入ってもらえると嬉しいんだが」

『・・・・・・・・・・』

「パートナーとして会食に出てもらうこともあるし、営業で不規則

だと匠に何かあっても困るだろう？」

『む・・・・・・・』

「そういった点でも、式はきちんと挙げたい。綾乃のお披露目でもあるからね」

ぐうの音も出ないとはこのことだろうか・・・・・・・なんか思い通りに進められて面白くなかった。

4章　5話

揉めて揉めて・・・・結局あたしが折れる形で、式場はとある海岸線にあるホテルに決まった。

仲間内での2次会は、従兄の勝己夫妻がやっているカフェを借りることにして。

去年改装をして、元々余裕のあったらしい土地にカフェスペースを広げていた。

あたしたちの暮らす家からも、勤務地からも程近く・・・・・有無を言わさずに貸切にした。

「綾～、料理はお任せでいいんだろ？」

貸切の話を持っていった時に、勝己がそう聞いてきた。

『うん、特にこだわってない。仲間内だし』

「じゃあ、こいつらに任せとけばいいよ」

こいつらとは、勝己の奥さんでもある蘭さんと、勝己と一緒にウインドスクールをやっている輝さんの奥さんの朱音さん。

基本的にカフェはこの二人が回していて、売り上げも上々らしい。
何度か食べてきているけれど、確かになかなかのものだ。
勝己と蘭さんも、結婚の時に色々あって・・・・・大変だったらしい。
でも今は、３男1女と４人もの子供に恵まれたというのに・・・・・
いい年したバカップルだ。
・・・・・８つ下の蘭さんの尻に、嬉々として敷かれてるといった感じでもある。
あたしが蘭さんや朱音さんと料理の相談をしている間、匠と亨さんは勝己相手にウインド談義に花を咲かせている。

「おかあさん！僕、勝己おじさんにウインド教わる！」
突然駆け寄ってきた匠が、目をキラキラさせながらそう言った。
『は？』
「亨おじさんはいいって！」
『・・・・・好きにしなさい・・・・・・・』
「やった！」

この二人・・・・・何言っても聞きやしないから、既に諦めの境地にいるわけで。

「ねえ、綾ちゃん。綾ちゃん、うちで働かない？」

突然朱音さんが言い出した。

「いいね。店大きくしたからさ、人が足りないんだよね」

『・・・・は？』

「だってお嫁に行くなら、仕事やめるんでしょ？じゃあ、暇よね？」

『朱音さん・・・・・・・・』

実は、まだ仕事の件は話し合いが済んでいない。

出来れば辞めたくないのもあるが、亨さんの立場を考えると微妙なところだ。

すでに社内でも、なんとなく微妙な立場になりつつあるのを感じている。

「本当は辞めたくないんだろうけど、ほんと考えてみて。綾ちゃんなら大歓迎だから」

『はい・・・・・・』

大まかな内容と日時を決めると帰宅して、ざっとだけれど2次会の案内状を作成した。

『亨さん、こんな感じかなぁ』

そう声をかけると、背後からＰＣを覗き込んでくる。

「ああ、いいんじゃないか？印刷はまた明日にして、今日はもう休もう？」

帰宅したのが9時を回っていたので、匠は既に夢の中だ。

データを保存して、電源を切るとバスルームに向かった。

4章　5話（後書き）

Ｉ　ｄｏｎ’ｔ　ｆｏｒｇｅｔ　ｙｏｕ　から勝己&蘭、朱音が登場。
勝己と綾乃は、歳の離れた従兄妹設定だったんですよ、実は。
時系列的に、Ｉ　ｄｏｎ’ｔ　ｆｏｒｇｅｔ　ｙｏｕ　から１０年位あとのお話に当たります。
・・・・・・じゃないと、勝己・・・・４児の父になれませんしｗ

4章　6話

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・もう、いいです。

この先なんかあって、もう一度結婚・・・なんて羽目に陥っても、
もう結婚式だけは却下。

こんなに恥ずかしいのは、もう絶対にいやだ！！！！！！！

出来るだけシンプルに！質素に！！って言ってたのに、立場上そう
はいかないと言われ・・・・ある程度は妥協したよ。

でも、ほんと・・・・・顔を引き攣らせないように笑うのが精一杯
だったわ・・・・・・。

匠の目はまん丸だし、友人たちのにやついた顔・・・・・・。

確かに必死にこらえてるあたしを見れば、友人たちは笑いたくて仕
方ないはずね。

お偉いさんたちの祝辞が長すぎるとか、ひっどい歌唱力の後輩の歌
とか・・・・・そんなんどうでもいいの。

何回もやらされたお色直し、ハート型のキャンドルへの灯火とか、馬鹿でかいケーキへの入刀とか・・・・・。

あと、既に大きくなり始めたお腹とか・・・・・何考えてるの？

だから悪阻の時期を避けて、ちょっと式も延期して今日に至ってるんだけど。

なんだけど・・・・・・・・・・・・・あの酒乱、どうにかしろ・・・・・・・。

あのバカを招待したのは誰だ・・・・・・・・・・・あたしだ。

『ニャロウ・・・・・・退職前にいじめてやる・・・・・・。あいつには仕事はやらん！』

そいつは営業部の後輩だった。

退職するあたしの仕事を、ほぼ引き継ぐはずのやつだった。

あんなのを後任にしたら、恥さらしもいいところだ。

っていうか、取引先の方々もいらしてるわけで、すでにそれだけで恥を晒してることになる。

あー、もう飲ませるな！ってか、つまみ出せ！

「綾乃？大丈夫か？」

隣でいらいらと引き攣りそうな笑みを見せているあたしに気付いて、亨さんが声をかけてくる。

『・・・・だめかも。あんにゃろう・・・・あとで抹殺してくれる・・・・・・』

「ん？・・・・・・ああ、あいつか・・・・・・」

あたしの呟きで対象の相手が誰か気付いて、そいつ・・・・・・春日雄介を一瞥する。

「大丈夫、俺に任せておけ。君の後任はあいつにはさせないから」

当の春日はご機嫌で、大酒をかっくらっている・・・・・。

引継ぎは、春日以外の今年度の新人数名に分けて、任せることになった。

かなり春日は渋っていたけれど（自分の成績ＵＰを見越していたらしい）、あたし達の結婚式での失態を理由にした。

当たり前だ、バカたれ！

お偉いさんも取引先もいる中で、大酒かっくらって大騒ぎするバカがどこにいる！

そう上司にきっぱり言い渡され、がっくりしてたけど。

おかげで引継ぎもスムーズに済み、無事に退職の日を迎えた。

「綾乃さん、お疲れ様でした！！」

「元気な赤ちゃん生んでくださいね！」

そんな言葉と共に、大きな黄色いバラの花束と、シルバー細工にアラバスターの蓋がついたオルゴールを同期から貰った。

私物は殆ど片付けてあって、職場を出たときの荷物はあまりなかった。

それでも急に大きくなってきたお腹が邪魔で、足元が危なくて帰りにはタクシーを贅沢にも使ってしまった。

終章　1

「お母さん・・・・・大丈夫？」

5ヶ月を過ぎた頃から、既に臨月か？って位の大きなお腹になったあたし。

腰痛や股関節痛が酷くて、横になることしばしば。

匠は弟妹が出来る喜びもあるけれど、手伝えることは何でもやってくれる。

さすがは4年生！と思う。

『うん、ごめんね～。手伝わせてばっかりで』

「大丈夫。だってもう5年生やん。手伝いくらい出来んのはみっともないやん？」

『サンキュー、助かる』

「とーちゃんは何しとんねん・・・・」

『忙しいんでしょ』

「そんなん言っとる場合じゃないやん」

亨さんと結婚することになってから匠は、素直に亨さんを父と慕っている。

実父とは元々疎遠であったし、今も連絡を取ることはしない。

そして只今、亨さんはめちゃくちゃなスケジュールで仕事に励んでいる。

かなりの高位の役職についてるのにも関わらず、何をやってるのか・・・・役職以上に働いてるわけで。

「ただいま」

やっと帰ってきたと思ったら、既に23時を回ってる。

『お帰り・・・・匠がたまには早く帰ってこいって怒ってたわよ?』

「あ〜・・・・そうだよなぁ」

匠のお怒りの原因はあたしの不調だけじゃない。

『もうずっと、対戦が止まったまんまなんだけど!・・・・・だって』

そう、ゲームの対戦相手が帰ってこないとお怒りなのだ。

「あー・・・・・そっちか（苦笑）もう少しで片付くからって言っておいてくれ」

『せめて朝食くらい一緒にとって、自分で言ったら？』

「うーん・・・でもほんとあと少しなんだよ」

『何が少しなのか、こっちはまったく分からないんだけど！』

何をやっていたのかがわかったのは、出産まであと１０日という頃。

「やっと完成した！これでやっと、今まで通りに過ごせる・・・・・」

『完成って何が』

「おいおい、俺たちの会社は何をやってると思ってる？」

『ん？』

「何の会社？」

『酒造メーカー・・・・・・だけど』

「そう。それだよ。新酒をね、創ったんだ・・・・出産に併せて」

『はい？』

あたしたちが家族になって、匠と新しい命が加わって、その記念に・・・・と思ったようで。

「いつか・・・・・みんなで飲めるといいよな・・・・」

『・・・・ロマンチスト』

終章　1（後書き）

やっぱりまとまらなかったので、2分割します。

終章　2

「なんだ？　だめか？」

『別に～』

あたしって、天邪鬼だなって思う。

ほんとはまったく血のつながらない匠までも、そうやって自分の子として受け入れてくれて・・・・そんな記念のお酒まで造ってくれて嬉しいのに。

『・・・・・・・・・・・・・・・・・・あっ・・・・・痛っ・・・・・・・・・・』

「どうした？」

『ん～・・・・来たのかも・・・・・』

慌てて病院に持っていく荷物を車に放り込み、亨さんの介助で乗り込む。

お腹の子は一人じゃないのが分かって、だから本来は帝王切開の予定だった。

そのための入院を3日後にするはずだった。
予定外の陣痛だった・・・・・・・・・・。

病院に到着して数時間後、緊急帝王切開で無事に出産を終えた。
生まれてきたのは、二卵性の女の子2人。
お互いにはそんなに似ていないのに、何故か亨さんにはよく似ている。

「やったー！僕の妹だ！でも弟も欲しかった・・・・」

「母さんに頼めばいい」

「そっか！お母さん！次は弟ね！」

『却下だ・・・・・・・・。こんなに痛いの、もう結構です・・・・・・・』

「えー！なんでー！」

「もう一人くらい余裕でいけるだろ」

『やだ』

女の子が2人加わったことで、一気ににぎやかになったあたしの生活。

あの日、貴史から電話が来て、その後に亨さんがやってこなかったら。

匠が家出して、上京してこなかったら。

こんなににぎやかにならずに、今でも一人でのんびりやってたんだろう。

これからも多分、こうやって毎日が大騒ぎで過ぎていくんだろう・・・・・。

幸せではある・・・・・大切な人たちに囲まれて。

それでもそっと・・・・誰にも聞こえないように溜息をついた。

いやだとかじゃない・・・・きっとこれは幸せならではの溜息なんだと思う。

『ほら、亨さん！匠！泣いてるよ！！』

一層子煩悩になった亨さんと、すっかりシスコンな匠が、ミルクとオムツを抱えて走っていく。

楽しんでいこう・・・・・この5人で。

そう思いながら、楽しげに双子の世話をする二人を見つめた。

外伝　1　SS（前書き）

綾乃の従兄、勝己視点

外伝　1　SS

「おい、匠(あのガキ)をどうにかしろ」

匠とは、従妹の綾乃の義理の息子だ。

血のつながらない綾乃を頼って、実の父の元から小学生の身で上京してきた。

それ以来一緒に暮らしており、少し前に上司と結婚した綾乃の頼りになる長男坊でもある。

その匠が、俺のところでウインドサーフィンの講習を受け始めた。

元々、瀬戸内育ちの彼は泳ぎも達者で、運動神経もいい。

だから、割とあっさりボードにも乗った。

『匠が何？』

上司に嫁ぎ退社した綾乃は、うちのカフェのスタッフでもある妻の蘭と、朱音のスカウトでうちで働いている。

その関係もあって匠は入り浸りになっている。

「うちのアイドル化してて、女共が騒いで講習にならん！」

『一緒にやらせなきゃいいだけじゃない』

「入れなくても来て騒いでるんだ！」

『そんなのあたしのせいじゃないだろうが！』

鬱陶しい・・・・・そんな顔してこちらをにらみつける綾乃。

ぬ・・・・昔のグレ具合はうちの蘭と変わらないから、こいつを怒らせると怖いんだった・・・・・・。

『これでいいだろ？店の売り上げも上がって、一石二鳥♪』

蘭も朱音もホクホク顔だ。

【匠との会話、ツーショット写真つき。ランチセット　¥1，500】

・・・・・・・・・・・さすがは元営業部勤務だよ。

息子まで商品にしてやがる。

でもそんな目論見に踊らされるお嬢さん方が、かなり殺到している

のは間違いない・・・・・・・。

匠自身も、小遣い（分け前ともいう）を貰えてただ飯つきでホクホクしているのはいうまでもない・・・・・・。

外伝　2　（前書き）

匠視点

外伝　2

お母さんの従兄の勝己おじさんに、ウインドを教わり始めて1ヶ月。
元々瀬戸内海の海で育ったし、慣れてたのもあってボードに立てる様になったところ。
でもまだ、すぐにセイルのコントロールを失って倒してしまう。
「匠くーん、がんばって～！！」
同じ講習に参加してた女の人たち。
やっぱりあわないってやめちゃったり、別の日にレッスンを受けてたりする・・・・んだけど、なぜか今日もおるんや。
勝己おじさんは、鬱陶しそうな顔しとる。
僕も正直気が散る。
でも一応、手は振っておく。
「きゃー！！！！！」

あー・・・・・またおじさんの眉間のしわが深くなるな・・・・・。

「おい、綾乃！！！！」

頭から湯気を出すみたいな勢いで、カフェコーナーで働くお母さんに噛み付く。

それに冷たい一瞥を与えるだけのお母さん。

「おい、匠（あのガキ）をどうにかしろ」

『匠が何？』

「うちのアイドル化してて、女共が騒いで講習にならん！」

『一緒にやらせなきゃいいだけじゃない』

「入れなくても来て騒いでるんだ！」

『そんなのあたしのせいじゃないだろうが！』

あー・・・・・また始まった。

でもこの従兄妹同士の口論は、最近の名物になっている。

一回り近く下のお母さんに、おじさんはいつも敵わないんだ。

『匠、ちょっと相談なんだけど』

「何？」

『あんた、商品になりなさい』

「お母さん、意味不明」

『【匠との会話、ツーショット写真つき。ランチセット】を作るのよ』

「えー、めんどくさいよ」

『分け前はやるぞ？』

「・・・・・・・・・いくら？」

『そうだなー、１セットにつき¥１００』

「・・・・もう一声」

『・・・・・・・・・¥１５０』

「・・・・¥２００」

『・・・・足元見るわね』

「当たり前でしょ？僕の労力考えて？」

『仕方ない、手を打とう』

かくしてそれは本当に売り出され。

『これでいいだろ？店の売り上げも上がって、一石二鳥♪』

【匠との会話、ツーショット写真つき。ランチセット　￥1，500】

蘭ちゃんも、朱音さんも売り上げが上がって嬉しそうだ。

苦虫を噛み潰したような顔なのは、勝己おじさんだけ。

当然僕の小遣いも増えたし、これで欲しかった新しいゲームソフトが買える・・・・・。

1回平均10人で￥2000・・・・・1ヶ月4回で￥8000・・・・・。

・・・・いつまで続くかは分からないけどね。

今のうちに稼いでおこうっと・・・・・。

【匠君　ランチセット】その後　SS

「お母さ～ん、蘭ちゃ～ん・・・・・このままじゃ僕、デブになっちゃうよ」

『何のためにウインドやってるの！』

「だって練習にならないんだもん」

『ぬ・・・・・・』

匠人気でメニューに加えた【匠・・・・ランチセット】は大好評で、練習に来た日は匠は引っ張りだこだ。

でもそのせいで、練習になってないらしい。

確かに毎週毎週殺到して、練習の妨げにはなっている。

このランチセット、人気がまったく衰えず・・・・・既に2年。

匠の血のつながらない双子の妹たちももうすぐ3歳になるし、そろそろ世代交代か？

実は双子たちも毎週この店には来ていて、亨さんと浜辺で遊んでいる。

すっかり海の大好きな女の子に育った。

そして、地元のサーファーたちのアイドル的存在になっている。

小さいながらもカトラリーを運んだり、すっかり店の看板娘だ。

「おかえりなちゃいまちぇ～、ごちゅじんちゃま～♪」

「あいっ、あ～んちてくだしゃい♪」

翌週からは小さなメイドが大活躍で、匠のランチセットを抜いた売り上げをフォローした。

評判のよかった匠メニューは、【匠】部分を抜いて価格変更して残している。

小さくておしゃまなメイドたちが活躍できるのは1日2時間がいいところ。

それでも2人を可愛がってくれるお客さんはたくさんいて、でも無理をさせることはない。

そして、店の売り上げは、いつも通り安泰で・・・・匠といえば女たちを押しのけてウインドに夢中になっている。

苦虫を噛み潰したような顔をしているのは二人の男たち・・・・・・・・・亨さんと勝己だけだった。

【匠君　ランチセット】その後　　ＳＳ（後書き）

アルファポリス様主催の、第４回恋愛小説大賞にエントリー中です。お気に召していただけましたら、是非、ポチよろしく御願いいたします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5733o/

An important person

2011年7月4日14時19分発行